

ひとつと考えられている。黄泉の国とこの世とは坂(さかい)で区切られ、その坂は「古事記」では「黄泉(よもつ)ひら坂」と記されている。坂は峠を越えるとそこは異世界だったからである。特に山中に存在する坂は、人々から異常な事態が起こりやすい場所として畏怖された。山賊や鬼や天狗や化物などが畏怖の対象だったに違いないが、要因は未知の異世界へ向かうことの不安である。それ故に国外追放(坂を越させる)が古くからの刑罰に存在していた。今では異世界とは、インターネット上の世界になってしまった。

### ●納涼(遊山船)

「納涼」は、古くは漢音で「どおりよう」と読まれていた。もちろん意味は同じで「暑さを避けて涼しさを味わう」ことである。冷房機が登場していない時代の都市部では、手軽に涼を得ることができる場所海辺か川であった。当時は、物資の運送方法に船が使われ、大型船(弁財船)の菱垣廻船や樽廻船を利用して江戸・大阪間を頻繁に往復していた。港で大型船から小型船に荷を移し、縦横無尽に開削された運河を利用して目的地まで運んだ。その開削された運河が、庶民にとっては格好の納涼名所になったのである。咄に登場する難波橋は、

江戸時代に幕府の経費で架設・架け替え・修復が行われた公儀橋(御入用橋)である。淀川(大川)分流の堂島川と土佐堀川を跨いで架けられ、現在の北区桶之上町と中央区北浜を結んでいる。架橋は古く奈良時代以前に遡る。

### ●なぜ「腐」なのか(酢豆腐)

豆腐の製法はというと、一晩水に浸けておいた大豆に水を加えながらドロドロに搾り潰し、そこに水を加えて煮る。数分煮立てて布袋に入れ、搾って豆乳をとる。その豆乳に凝固剤(にがり又は硫酸カルシウム)を入れて凝固させる。これを「くみ豆腐」や「おぼろ豆腐」という。更に重石を乗せて水分を切ると、木綿ごし豆腐ができる。豆腐は中国から伝わった。豆腐は漢の時代に淮南王の劉安が始めたという。中国ではヨーグルトを乳腐といい、乳が凝固固まったものをさす。豆腐と製法が似ている。「腐」はくさる、ただれる、いためる、という意味で「腐って物の形が崩れること」なのだが、豆腐も乳腐も腐っているわけではない。乳腐は乳の凝固固まったもの、という意味なので、「腐」の文字で、形が変化した状態を表現したと思われる。

### 次回予告

第 649 回

7月29日<金>より6時開場/6時30分開演

熊の皮 ● 春風亭一蔵  
浮世床 ● 柳亭小痴楽  
幸田露伴作  
幻談 ● 八光亭春輔  
仙気の虫 ● 柳家権太樓  
お若伊之助 ● 隅田川馬石

公演予定 8月26日<金>/9月30日<金>/10月26日<水>/11月30日<水>

### ■ 当世噺家気質 その232・春風亭一朝と「酢豆腐」

「今の若い人たちは口演の機会が多くて羨ましいよ。あたしたちの頃は、若手の会なんてめったにないから、せっかく大ネタを覚えても、やらないまま忘れちゃうんだ」

それでも、若き日の一朝がせっせと大ネタを仕込んだのには、理由があった。1970年代後半、上野本牧亭で開かれた若手花形落語会。柳家さん喬、五街道雲助、立川左談次、古今亭志ん橋(当時は志ん太)、柳家小里んら、実力派の若手レギュラーが鍋をけずる「伝説の二ツ目勉強会」で演じるためだ。

「みんなライバルだからね、持ち時間とか出番の浅い深いなんて、お構いなし。サラ(開口一番)からトリまで熱演続きで、演者もお客さんもふらふらになったよね。そこで皆を唸らそうというんだから、必死で稽古しましたよ。でもね、せっかく大物を覚えたのに、花形で一度やった後は、もう演じる場所がないんだよ」

そうしてお蔵入りになったネタの一つが「酢豆腐」だという。

初代柳家小せん、八代目桂文楽、古今亭志ん朝と歴代の名人上手が手がけた。知ったかぶりの半可通を「あいつは酢豆腐」と言う。この噺の改作「ちりとてちん」は上方に移植され、それがまた東京へ逆輸入されて人気演目になった・・・等々、逸話にはキリがない名作である。

一朝は、古今亭志ん朝に「酢豆腐」を教わった。

「おい、ちょっと見てみな。この熱いのに、顔にいっぱいお天道様受けて、汗ぐっしょりで軒かいて寝てやんの。神経がねえのかな。おい、源ちゃん！」

「(目を覚まして、大あくび) かあっ、たあっ、ああ〜。ひでえ汗だ。こう暑くっちゃ、とても寝ていられねえ」

志ん朝版の「酢豆腐」は、威勢はいいが金がないと言う、江戸っ子の若い衆が全編躍動する。噺の冒頭、いかにも様子のいい志ん朝が、源ちゃんの大あくびを物凄顔で演じるあたりから、笑いが弾けるのだ。

「その時の志ん朝師匠の顔があまりに面白くてわ、あたしは思わず、ひっくり返って笑っちゃった。師匠、怒ったねえ。『笑うな、バカヤロー!』って。大好きな噺なのに、いつの間にか忘れてた。でも、古いテープを聞いたら、セリフがすらすら出てくる。ネタはちゃんと体に入っていたんだね」

一朝が「酢豆腐」の稽古をしているという話を聞いて、弟子の一之輔が訪ねてきた。

「師匠、『酢豆腐』やるんですって? 私は師匠のを聞いたことないですよ」

「そうだろう? やったことないもん」

もちろん、一朝は一之輔に「酢豆腐」を教えたことはない。

「誰に教わったか知らないけど、迎っていけば、あたしと同じ志ん朝師匠にたどり着くと思いますよ」

一朝の「大あくび」も当夜の見ものである。

(長井好弘)

## 第六百四十八回

# 落語研究会

日時 ● 令和四年六月二十九日<水>より六時三〇分開演

会場 ● 国立劇場<小劇場>

主催 ● TBSテレビ

# 《演目》

新聞記事 ● 柳家さん光

欠伸指南 ● 五街道雲助

団子坂奇談 ● 入船亭扇辰

# 《仲入》

遊山船 ● 桂吉坊

酢豆腐 ● 春風亭一朝

三味線 太田園子 笛 春風亭一花

松尾あさ子 太鼓 入船亭小辰

前座 三遊亭ごはんつぶ

## 新・落語掌事典 (二二八) 田中優子

### ●てんぷら (新聞記事)

この演目は桂文屋が創作した『阿弥陀池 (新作和光寺)』という上方咄で、昔昔亭桃太郎が東京へ移したそう。てんぷらの話題をめぐる新聞記事が発端なので、こういう題名になったのだろう。江戸時代、てんぷらは上方と江戸では異なる食べ物だった。上方では魚等のすり身を素揚げしたものを意味した。江戸では、素材にゆるく水溶きした小麦粉で衣をつけて揚げたものを意味した。江戸では屋台で辻売りされ、庶民の安価な食べ物だった。てんぷらの語源はスペイン語のテンプロ (寺院)、テンボラ (カトリックの金曜日の祭り)、テンペロ (調理) などが転訛したものとする説がある。しかしそれを実証する文献的証拠は発見されていない。これも文献が残されている訳ではないが、てんぷらに当てた「天麩羅」という漢字は、業者に販売を相談された山東京伝の考案だといわれている。

### ●あくびのしくみ (あくび指南)

あくびでは、全身的に様々な変化が起こっている。分析によると、

胸郭の拡張、横隔膜および喉頭の下降、鼻翼と軟口蓋の上昇、舌の後下方への移動、声帯の外転、口の開大、口蓋帆張筋の収縮、閉眼、流涙、頭部の後方への伸展、上腕の側方への伸展、前腕の上方への伸展、四肢の血管の収縮、心拍数増加、心臓への静脈還流の増加、肺胞ガス分圧の大きな変化などである。これらには大脳新皮質、線状体、視床下部、大脳辺縁系、自律中枢などの関与があると考えられている。もしあくびというものができない人間があくびを稽古するとすると、今までのどんな芸より難しいはずだ。

あくびは伝染をするそうなので観客席の皆さんも、猪牙舟で首尾の松辺りを流している気分になるのも一興だ。見ているのは壇上の嘶家さんだけだから、無理に嘯み殺す必要はないだろう。

### ●坂 (団子坂奇談)

団子坂は、東京都文京区千駄木の三・五丁目と一・二丁目の境を東西に通じている。この坂に団子を売る茶店があったことからついた名前だ。千駄木坂や潮見坂とも呼ばれている。古くから坂は分水嶺と同様に地域区分上の境界であった。境はサカヒと読み、坂の語源の

(裏面へつづく)